

2960

二

軍
鳩
能
力

軍鳩研究報告
附錄第一篇

目次

第一章

緒論

第一節

能力調査、必要

第二節

能力調査、困難

第三節

軍鳩能力に対する結論就

第四節

能力調査、方法

第五節

調査、材料

第六節

通信能力、解説

第二章

既訓練鳩、能力

第一節

訓練放鳩、成績

第二節

記憶度

第三節

既訓練巨鳥、通信巨

第四節

高遠の場合、返還精度

第五節

天候、関係

第六節

地形、関係

第七節

時期、影響

第七節

寒暑、関係

第八節

放鳩時、関係

第九節

開置日数、関係

第十節

訓練方向、関係

第十一節

負荷、影響

第十二節

危害、関係

第十三節

鳩上、心理状態、関係

第十四節

放鳩法、関係

第十五節

放鳩地点、関係

第十六節

放鳩者、関係

第十七節

飼育者、関係

第十八節

互齡、関係

第十九節

雌雄、関係

第二十節

鳩種、関係

第三章

第一節

未訓練鳩ノ能力

訓練放鳩ノ成績及規定ノ

放鳩法ヲ行ヒ時ノ成績

記憶度

第三節

既訓練放鳩巨商ヨリ通信

巨商遠キ場合ノ返還精度

第四節

天候トノ關係

第四章

準備日数

第一節

能力ト準備日数

第二節

常設鳩舎ニ於ケル

鳩ノ準備日数

第三節

急設鳩舎ニ於ケル鳩

ノ準備日数

第五章

艦上鳩ノ能力

第一節

艦上鳩トシテ採用スル鳩

第二節

碇泊中ノ通信ヲ行得

ル迄ノ訓練日数

第三節

碇泊中ノ通信能力

第四節

航海中ノ通信ヲ行得

迄ノ訓練日数

第五節

航海中ノ通信能力

第六節

將來ニ於ケル艦上鳩

ノ発達ノ可能性

第六章

陸上移動鳩軍鳩ノ能力

第一節

整置後三時間以内ニ

六ノ將ノ通信ヲ行フタメ

ノ訓練及成績

第二節

白粉通信ヲ行フタメノ

準備日数及ヒ訓練法

第七章

夜間鳩ノ能力

第一節

幼鳩ヲ以テ四〇斤ノ夜間通信ヲ行フタリノ準備日数

第二節

既訓練ノ夜間成鳩ヲ以テ六〇斤ノ夜間通信ノ準備日数

第八章

往復通信鳩ノ能力

第一節

往復通信可能巨禽及難見

第二節

六〇斤往復通信成績

(了)

第一章

緒論

第一節 能力調査の必要

鳩、能力ニ關シテハ往々誤解セラレ方ニ於テハ其ノ「レコード」ヲ目シ鳩全般ノ能力ヲ信ジ徒ニ過大ナル要求ヲナスモアリ。又他方ニ於テハ貧弱ナル狀況ニ於ケルニミ例ヲ見テ鳩ノ無能ヲ説ク者アリ。故ニ此レカ誤解ヲ解キ軍鳩ノ能力ヲ数字的に示スハ鳩ノ用途ヲ決スル上ニ於テ極メテ必要ナルノミナラス尙鳩ヲ使用スル場合ニ於テモ次ノ諸項ニ對スル參考トシテ缺クヘカナル事ナリ。

- (1) 平時、戰時、鳩舎設備地点決定（計畫者）
- (2) 鳩ヲ通信ニ使用スル機會、決定（指揮官）
- (3) 必要ナル距離ニ對スル充分ル鳩數準備（鳩管理者）
- (4) 攜帶鳩數及ヒ通信文ニ對スル放鳩數、決定（鳩通信者）

第二節 能力調査の困難

鳩通信ハ鳩ノ取集能力ヲ利用スルモノシテ其ノ取集成績ハ次ノ三者ニ依ラ決定ス

(1) 飛翔能力（体力）

(2) 方向判定能力（智力）

(3) 取集意志（情意）

此、中ノ(1)ニ關シテハ容易ニ数字的に示スヲ得レトモ(2)ニ關シテハ方向判定力、

何ニ基固スルカ不明ナル上ニ各種ノ事項影響ヲ受ケルヲ以テ容易ニ知ル能ハズ(3)ニ關スル
 軍ニ規定スルニ止マル故ニ鳩ノ能力ハ定量的ニ決定スルコトハ可能ナルモ定数的ニ決
 定スルハ甚ク困難ナリトス。

第三節

軍鳩ノ能力ニ對スル結論ニ就テ

右ノ如キ事情ナルヲ以テ軍鳩ノ能力ニ對シ結論ヲ要フル事ハ極メテ困難ニシテ
 人ニ依リ其ノ說ヲ果シ輕卒ニ論スル時ハ誤リヲ生スル虞レアリ依ツテ本編
 ニ於テハ勿メテ統計ニ忠實ナラントシ斷論ヲ要フルヲサケタリ。

但シツノ統計成績ハ横須賀航空隊ニ於テ實驗所常用トシテ使用シタル鳩ニ依ル
 モノニシテ体力智能ニ於テ中等ノ鳩ナリ從ツテ其ノ能力成績モスヘテ普通鳩ノ
 モノナルヲ忘ルヘカラス之ヲ以テ軍鳩ノ最大能力ナリト思惟スルハ稍早計ナリ
 軍鳩ノ能力モ亦漸次進歩向上セシメ得ヘヤコトヲ常ニ念頭ニ置クヲ要ス

第四節

能力調査ノ方法

軍鳩能力ノ平均値ハ統計ニ依ツテ求ムルヲ得レトモ此ノ平均値ハ各種ノ状況ノ影
 響ヲ受ケタルモノナルヲ以テ基準トイフヲ得ス又毎回ノ放鳩毎ニ異ニ影響ヲ
 受ケタルヲ以テ常ニ其ノ平均値ニ近キ成績ヲ以テ取算ストモ考フヘキニ非ス
 先ツ或ル基準ノ状態ニ於ケル成績ヲ知りソレニ其ノ時ノ状態(殊ニ天候ト訓練
 程度)顧慮シ其ノ時ノ予想成績ヲ決定セサルベカラス此ノ調査ニ於テハ基準下
 状態トシテ訓練放鳩(状況不良トモ除ク)ヲ採用セリ。

既訓練鳩（前年）於テ。料附近、訓練ヲ行ヒシモノト未訓練鳩（前年）於テ
五。料以上、訓練ヲ行ハサリシモノトハ其、能力ニ大ニ差異アルヲ以テ章チテ別チテ
論セリ其、何レニ於テモ先ツ訓練後鳩成績ヲ記シ次ニ此、成績ニ變更ヲ起スル
各種ノ事項ニ就キ記セリ
但、未訓練鳩ノ成績ニ影響ヲ起ス事項中、既訓練鳩ト同様ノモノハ之ヲ省
畧ス

第五節

調査材料

軍鳩ノ種類素質等、依リ先天的ニ能力ノ差異アリ
此、調査ニ用ヒタル材料ハ主トシテ大正十一年度ニ於ケル横須賀航空隊鳩舎ノ成績
ナリ今後ニ於テ或ハ優良鳩ノ購買或ハ同種交配ノ爲メノ能力低下等ノ事、債
依リ若干ノ差違アルヘシト雖モガ、ル際ハ適当ナル修正ヲ施スヘク要スルニ此、調
査ハ軍鳩能力ニ対スル大体ノ標準ヲ示シタルニ過キヌ

備考

一、爲念中野ニ於ケル陸軍鳩成績、依リテ調査セシメ是レト殆ント同様ノ結果
ヲ得タリ。

二、横須賀航空隊鳩舎ハ大正九年三月陸軍ヨリ百羽ノ令讓ヲ受ケタルニ始マリ
九年ハ近距離ノ訓練ハ、ニ止マリ十年ハ武蔵野及ハ文島ニ延伸シ十一年ハ
長嶋ハ文島、釜谷ニ訓練セシメ十一年ハ本隊鳩舎ヨリ比較的優良ト認

ラル鳩ノ大部分ヲ艦上鳩舎ニ移シタルヲ再ニ近距離ノ訓練ニ止ムルヤハ
得サルニ至リ、故ニ既訓練鳩ノ成績トシテ参考ニスヘキハ大正十一年度ニシテ、
米訓練鳩ノ成績トシテハ十年度ヲ一部加ヘタリ。

三、第二章及第三章ニ於テハ調査ヨリ得タル結論ノミヲ記セリ。調査材料ノ
主要ナルモノハ附録トシテ添タルヲ以テ詳細ハ之ヲ参照スベシ。

四、第二章第三、四節及第三章ノ第三、四節ニ掲ゲタル表ハ僅少ノ材料
ヨリ推定シテ作製シタルモノナレハ確實ナルモノニ非ス、今後研究ノ上変更スヘキ
モノナリ。

第六節 通信能力ノ解説

通信能力ハ即チ飯巢能力ナリ

飯巢能力ハ飯還精度ト到達速ガヲ以テ表シ、歸還精度ハ当日歸鳩數

(夜間鳩ハ当夜)ノ放鳩數ニ対スル百分比ヲ以テ表ス、實用通信ノ場合ニ於テハ翌日

飯舎タルモ信丈ノ種類性質ニ依リテハ充分ニ其ノ日飯ヲ達シ得ルコト多カルヘキモ

本調査ニ於テハ便宜上翌日飯舎ハ失格トシタリ、軍用ニアリテハ速力ノ大ナル

コト勿論必要ナルモ通信ノ確實ヲ期スルコト最モ肝要ナルヲ以テ速力ヨリモ

先ツ飯還精度ノ良好ナル鳩ヲ尊重スルヲ至當ナリトス。

到達速力ハ平均速力料時ヲ以テ示ス、本調査ニ於テハ便宜上二ノ新時以上

ノモノミ調査材料ニ用ヒタリ

基準成績ハ飯還精度及ビ到達速度(即チ各種速力ノ到達歩数)ヲ示シ、
モ其他ハ飯還精度ノ記載ノミ止ムカ、ルモノニ對シテハ基準成績ニ於ケル到達速度
ヨリ推定スヘシ

〔備考〕

数多鳩中ニハ途中ニ於テ信書管落失スルモノアルヲ以テ通信能力ト飯集能力トハ
確實ニ致セズ去ル震災ニ於ケル陸軍々鳩通信ノ例ヲ見ルモ信書管落失セルノ
約五%ヲ占ム、失踪ニ依ル通信不達ノ割合ヨリ大ナリ。然レドモ海軍ニ於テ現ニ使用
シテアル信書管ハ構造良好ナルタメ落失ノ機会少ク又通信者ノ注意ニ依リテ
信書ノ落失ハ防ギ得ルモノナレバ通信能力ト飯集能力トハ同一ナリト見奉ルベシ。
但シ事象具ニ於テハ一%位ノ差異ハ免レサル可シ。

第二章 既訓練鳩ノ能力(前年ニ於テ三%料以上訓練セルモノ)

(1) 第一節 訓練放鳩成績(通信距離トノ關係)

訓練距離	速力	當り飯還鳩 數百分率	備考
自一。料	三。料時以上	九〇	是ヲ既訓練鳩ノ基準成績ト呼稱ス
至二五。料	四。料時以上	六〇	訓練放鳩ニ於テハ淘汰及訓練ラレシ、距離ノ長ハ故ニ三。料位迄ハ飯還精度及速力同一ナリ
自五。料	六。料時以上	二〇	ニ五。料以上ニ於テハ一般鳩ノ飯還精度ノ長カ
自五。料	七。料時以上	八〇	

至三九〇秒	四〇秒時以上	五〇	次より低くスルモノナリ
六〇秒時以上	七〇		

(四) 三九〇秒—六〇秒

横須賀航空隊塲舎に於てハ四〇秒以上ノ訓練放鳩ノ實驗ナキヲ以テ(海軍陸軍ノメ
一〇秒ノ訓練ヲ終了セルモノヲ四〇秒及六〇秒ニテ各三羽づ、放鳩セシメ全部
矢際セリ)中野陸軍ニ鳩ヲ参考トシテ論スルニ速カノ低下ト距離ノ増大トハ
相待ツテ返還積度(即ち日訓達率)ヲ減少セシメ六〇秒附近ニ於テハ
返還積度ハ二〇%ニ過キス

(ハ) 近距離三〇秒以内ニ於ケル成績ハ一般ニ不良ナリ之ハ長期間訓練セザリ
シ爲ニシテ五十秒以上ノ訓練後ナレハ既訓練鳩基準成績ニ近キ成績ヲ
得ルベシ近距離放鳩ノ場合ハ呼込等ノ費消時凡爲メ速カノ稱不足ナリ
コトアリ。

(備考) 陸軍ニ於テハ正十一年度正十一年度ニ併記ノ結果ニ依リハ当日返還百分
率ハ次如シ(中等鳩ニ依ル實驗)

巨南	地	形	平	地	海	上	山	地	平	均
一〇〇	八四	九四	七〇	八七	九一	八七	八七	八七	八七	八七
二〇〇	八八	九七	七〇	九一	九一	九一	九一	九一	九一	九一
三〇〇	八八	九七	七〇	九一	九一	九一	九一	九一	九一	九一
平均	八二	九六	七〇	八七	九一	九一	九一	九一	九一	九一

第二節 記憶度(訓練後、日数ノ關係)

或ル地点ニ對スル訓練後、時ヲ經ルニ從ヒ、其ノ地点ニ於テ、方向判定力ヲ失フカ
故ニ、其ノ地点ヨリモ距離ヲ短縮スルニ米、レバ基準成績ヲ得ル能ハス、次表ハ
某巨離訓練后、日数ヲ經ルニ從ヒ、基準成績ヲ得シク爲メ短縮スベキ巨離ノ
大体ノ標準ヲ推定シタルモノナリ。

訓練巨離	訓練後、日数	半月或ハ一月	一月或ハ二月	二月或ハ四月	半年	一年
五〇科	七五	七五	五〇	三五	三五	三五
七五	一〇〇	七五	五〇	五〇	五〇	三五
一〇〇	一五〇	一〇〇	七五	五〇	五〇	五〇
一五〇	二〇〇	一五〇	七五	七五	七五	五〇
二〇〇	二五〇	二〇〇	一〇〇	七五	七五	五〇
二五〇	三〇〇	二五〇	一五〇	七五	七五	五〇
三〇〇	三五〇	三〇〇	二〇〇	一〇〇	一〇〇	五〇
三五〇	四〇〇	三五〇	二五〇	一〇〇	一〇〇	五〇

但シ、一月以上經過セルモノニ對シテハ、二〇科以上適宜ノ所ニテ準備放鳩ヲ行フ
ヲ要ス

第三節 既訓練巨離(記憶巨離)ヨリ通信巨離遠キ
場合ノ帰還精度

既訓練距離ヨリ實際ノ通信距離遠キ場合基準成績ト等シキ成績ヲ示シ、
ルハ勿論ニテ大凡次ノ如キモノト推定ス

既訓練距離	通信距離	五〇料	九〇料	一〇〇料	一五〇料	二〇〇料	三〇〇料	四〇〇料
五〇料	九〇%	七〇%	五〇%	四〇%	三〇%	二〇%	一〇%	〇%
一〇〇	九〇	九〇	七〇	五〇	四〇	三〇	二〇	一〇
一五〇	九五	九〇	九〇	七〇	五〇	四〇	三〇	二〇
二〇〇	九五	九五	九〇	九〇	七〇	五〇	四〇	三〇
三〇〇	九八	九五	九五	九〇	九〇	七〇	五〇	四〇
四〇〇	九八	九五	九五	九〇	九〇	七〇	五〇	四〇

第四節 天候トノ關係

軍機能力ト天候ノ關係トヲ論ズルタメ天候ヲ四種ニ別ツ

風力 三米毎以内

甲 雲量一〇ニ達スルモ薄雲或ハ高ク霧露ナク視界十五軒以上アリ
雲雨等ナシ

乙 風ハ逆風ナルカ三米——六米秒以内ノ逆風側風
薄雲薄霧等アリモ視界ハ六米以上アリ

小雨小雪

六米——一五米秒ノ逆風側風

丙 稍深キ霧アリ視界一杆以上

中雨雪等アリ

丁 暴風

豪雨

甲 大作ニ於テ鳩通信ニ過ギタル天候ナリ

乙 近距離ニ於テモ多少成績ニ影響ヲ及ボス遠距離放鳩ニ於テ飛翔

区間ヲ通レテカル天候ナラハ相當ノ差異ヲ生ズ

丙 飛翔区間全部ニ亘リ雨ノ天候ナルトキハ帰還精度甚レク低下ス

区間一部ナル時遠距離ナラサレハ相當ノ飯還精度ヲ有ス意志強

固ナル鳩ニ天候ニ對シテ訓練セラレタル鳩或ハ熟地ナル時或ハ空腹

等ノタメ飯還意志強烈ナル時等ハ悪天候ニ打テ勝テ得ルモノナレ共

然ラサル場合ハ天候ノ回復ヲ待ツモノ如ク翌日飯還スルコト多シ

丁 此ノ場合ハ殆ンド通信ノ望ミナレ尚是等ヲ表ニテ示ス時ハ

天候 地名	横須賀	父島	那覇	澎湖島
曇天日数	一五二日	二一三日	一一六日	二五二日
快晴日数	三六日	八日	三二日	三六日
濃霧	一〇日	二日	二日	二日
降雨日数	一五二日	一九八日	二〇二日	九五九日
暴風日数 十米以上、風速	八五日	一三二日	九一日	二三五日

備考一 気象統計表に依る年間天候日数表

天候の種類	甲	乙	丙	丁
帰還精度	六五%	三三%	一〇%	三%

遠く巨島放鳩、如く飛翔範囲
飛翔時間多ク、時ハ之ヨリ
少シク不良ナリ。

右甲乙丙丁ナル天候一年中、百分率ト鳩ノ飛翔範囲ト飛翔
時間ト關係ヲ論ズルニ飛翔範囲ヲ追テ、百斤圏飛翔時間ヲ三時間
位ト見做スト、千ハ大体ニ於テ左表、如シ

天候 巨島	甲	乙	丙	丁
五〇斤以下	九〇%	八〇%	五〇%	五%
一五〇斤以下	九〇%	七〇%	三〇%	〇%
四〇〇斤以下	九〇%	四〇%	〇%	〇%

天候地名	横須賀	父島	那覇	澎湖島
曇天日数	一七七	一四四	一六八	一七七
日照百分比	四一%	五〇%	四二%	四八%

即チ天候ノ莫ニ於テ父島ハ鳩舎設備地莫トシテ最モ状況ヨク澎湖島ハ最モ不良ナリ

第五節 地形トノ關係

鳩ノ方向判定ハ第六感ニ依ル本能的判断ト共ニ記憶聯想ト視覚ニ依ル智能的判断ニ依ルコト大ナルモノ如シ故ニ地形ノ状況ハ方向判定ニ重大正影響ヲ及スモノナリ又鳩ハ海ニ對スル恐怖心ト陸地ニ對スル執着性ヲ有ス(此ノ傾向ヲ少ナカラシムルタメ本隊ニ於テ海上訓練ヲ多ク行ヒタリ)

(イ) 地形複雑ナル地ニ於テ成績悪シク平地ニ於ケルヨリモ返還精度約二〇%不良ナリ本隊ニ於テハ山北附近ヨリ放鳩ノ際此ノ傾向アリ

(ロ) 平地又ハ海上(殊ニ海上)ニ於テ著明ナル目標ガ鳩舎方向ニ適当ナク或任セルトモ良好ナル影響ヲ與フルモノナリ然ラサル場合ハ却ソテ方向判定ヲ困難ナシム陸軍ノ海上方面ニ於ケル成績良好ナルハ伊豆ヒ島ヲ返巢ヲ容易ナシムル如ク南北線上ニ点在セルニ依ル

(ハ) 鳩ノ陸地ニ對スル執着性ハ陸軍駐屯附近ノ放鳩ニ於テ要影響ヲ與フル例

へ下圖A地より放鳩スル時ハ先ツ最近キ
海岸ニ赴キ其處ヨリ海岸ヲ迂回シテ飯コトヲ
得ルA地莫ク放鳩前ニB地莫ク訓練ヲ行ヒ
置ク時ハ此ノ傾向ヲ大部分矯正スルヲ得
(二)又鳥嶼下圖ノ如ク散在スル時Bナル放鳩
地莫ク鳩舎Aへ直行セズC、D、E、経テ
飯舎スルコトアリ此ノ状況ハ南洋ニ鳩舎ヲ
設置セシ際ニ實驗セシ事項ニシテ
其ノ際フノ故ハA、B間ニ於テ短艇ヨリ
準備放鳩ヲ行フコトニ依リ矯正スルヲ得タリ
(三)鳥嶼及ヒ陸地ヲ全ク見ル能サル洋上ニ於ケル放鳩ハ
未タ實驗セサルモ大畧平地ト同様ナリト推定ス

第六節

時期ノ影響

軍鳩ノ管理上一ケ年ヲ次ノ五期ニ別フ

- (1) 分離期 十二月中旬ヨリ二月下旬迄
- (2) 抱卵期 三月月上旬ヨリ六月下旬迄
- (3) 第一訓練期 七月月上旬ヨリ八月下旬迄
- (4) 換羽期(換羽最盛ナリトス) 九月月上旬ヨリ十月中旬迄
- (5) 第二訓練期 十月下旬ヨリ十二月月上旬迄



分
離
期

但し冬期ナルコ以テ基準成績ヨリ稍不良ナリ。分離鳩ハ分離後ニ於テ訓練
ハ七八五軒以内ノ通信ニ使用スルコ得。但し此場合歸還精度ハ約 50% 低下スヘシ。

抱卵育雛中ハ体ヲ消費シテアルヲ以テ之ヲ信ニ使用セザルヲトス

故ニ此ノ期間ニ於テ石五十種以上ノ巨禽ヨリ通信ヲ行フ必要ナルトキハ必要鳩
數ノ應役鳩トナシ擬卵ヲ抱カシテ直接繁殖ニ從事セシムルヲ可トス。

長臣放鳩訓練ニ最モ適スル期間ニシテ其ノ飯還成績ハ即チ基準下成

(4) 換羽期

七)

(4) 第二期訓練期

延伸訓練又ハ補修訓練ヲ課スルニ適當ナル時期ナリ
右各時期ニ於テ通信距離ノ変化ハ凡ソ如シ(繁殖期ニ從事セザル鳩ハ換羽期
ニ於テ一五〇斤以内ニ距離ノ制限ヲ受クルノミ)

季節	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
通信距離	七五斤以内	七五斤以内	七五斤以内	七五斤以内	七五斤以内	七五斤以内	七五斤以上	七五斤以上	七五斤以上	七五斤以上	七五斤以上	七五斤以上

第七節

寒暑トノ關係

概シ五度ヨリ二十五度迄ノ間ハ鳩ノ飛翔ニ最モ適セリ温度ナレトモ零度ト二十度
ノ間ナレハ鳩ノ能力ニ殆ト減退ヲ認メス然レトモ零度以下及二十度以上ナレハ
以テ異和ヲ感シ零度及ヒ概シ二十度附近ニ於テハ百五十斤以上(或ハ百斤
以上)ノ放鳩ヲ不適當トスルモノ如シ。

但シ此ハ過帶地方ニテ飼育セラレタル鳩ニ限レテ述ヘタルモノニテ熱帶或ハ寒帶
地方ニ於テ飼育訓練セラル鳩ハコノ限度ヲ超ヘテ其地方ノ温度ニ對シテ
適應ルモノナリ參考タメ日本各地一年中ノ最高最低温度ヲ示ス

地名	横須賀	父島	澎湖島	青木林	大連	大泊	那霸
最高温度	三三度	三三度	三三度	三三度	三五度	三九度	三九度
最低温度	零下三度	九度	九度	零下六度	零下七度	零下三度	九度

第八節 放鳩時との関係

夜間訓練の課サレ鳩ハ暮暮迄返着し得ル場合ニハ途中宿泊スル例トス
故ニ放鳩時遅キ時ハ返還精度変化スルモノニテ其時ノ帰還精度ノ到達速力ニ依
リテ左右サル、今日設ケ午後六時トシ午後七時迄帰舎可能トスル時ハ返還精度ヲ
変化セシメス下放鳩し得ル時刻左ノ如シ。

距離	速力	二ノ時	四ノ時	六ノ時
五〇	午後四時五分	午後五時十分	午後六時十分	
一〇〇	午後三時	午後四時十分	午後五時十分	
二〇〇	午前九時	午後三時十分	午後三時三十分	
三〇〇	午前四時	午前七時十分	午後二時十分	
四〇〇		午前九時	午後〇時三十分	
五〇〇		午前六時十分	午前七時三十分	
六〇〇		午前四時	午前九時十分	

放鳩時ハ遅クモ四ノ時以上ノ力当日中ニ到達し得ル様ニ擇ハサルハナラズ
途中宿泊スル時ハ(他ノ猛鳥ノ害ヲ受クル虞アルノミナラス)必ズミテ翌朝取
舎ストハ限ラズ数日後ニ取舎スル事アルヲ以テ当日中ニ到達ノ見込ミナキ時
ハ寧ろ翌朝早ク放鳩スルヲ可トス

(注意) 昼夜ヲ兼用シ得ル場ハ此ノ制限ヲ受ケス

第九節 閉置日数トノ關係

大正十年度ニ於テ熱帶地方航行中一週間ノ籠閉置ヲ行ヒ、後八丈島ヨリ放錨シタリニ基準成績ト同様ノ好成绩ヲ得タリ

十二年度ニ於ケル震災ノ際、東京ニ約一週間殆ト絶食ニ近キ有様ニシテ籠閉置シタルニ相当ノ成績ヲ得タリ、コノ例ヨリ考フル時ハ一週間位ノ閉置ハ

敗業成績ニ殆ト影響無キモノナリ。

本隊ニ於テハ右以上ノ長期閉置ノ實驗ナキモ陸軍ニ於ケル實驗ノ結論ニ依リハ籠閉置ハ三週間鳩合閉置ハ六週間ヲ作度トス

但シ是ハ周到ナル注意ノ下ニ行ハタル場合ニシテ震災ニ於ケル使用ノ成績ヨリ見ル時ハ閉置十日以上ノ場合ハ稍能力ノ低下ヲ見ル故ニ閉置日数ハ二週間以上ニ及ハサルヲ可トス

第十節 訓練方向トノ關係

基準成績ヲ得タルハ訓練方向ニ對シテ用ヒラレタル時ニシテ訓練方向以外ノ場合ハ八丈ノ如キ結果ヲ生ス

訓練巨禽(將)	使用巨禽(將)	訓練方向上ノ帰還精度	備考
四〇〇斤	一〇九	四五度	八二%
(金樽也)	(餌子)		
(解明)	(東葉)	九一度	一〇〇%

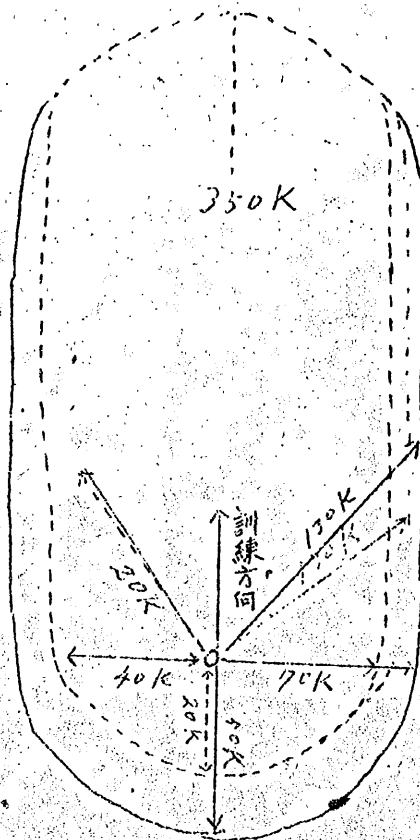
横須賀海軍工廠、西條島、四日市、東京ニ使用
全部ニ對シテ時ニテ飯舍也

訓練巨鳥(斤)	使用巨鳥(斤)	訓練方向ト使用方向ト差	飯還精度	備考
五〇	五〇	一八〇度	二三%	中等以下ニ於ケル鳩ノ實驗(陸軍)
五〇	一八〇度	七五%	全稱鳩三十斤ノ準備放鳩ヲ行フ(陸軍)	

以上ノ成績ヲ綜合スルニ三〇〇斤以上ノ訓練ヲ行ヒタル後訓練方向以外ノ方向ニ使用セントスル時ハ豫メ使用セントスル方向ヲ付シテ二〇斤一八〇斤(反方向場合ハ二〇斤九〇度方向ノ場合ハ四〇斤四五度方向ノ場合ハ八〇斤)ノ準備放鳩ヲ行フヲ可トス

下圖ハ通信可能距離ヲ示ス

〔点線ハ準備放鳩ヲ行フポイント
九〇%ノ飯還精度ヲ得ヘキ
距離、点線ハ準備放鳩ヲ
行ヒタル後九〇%ノ飯還精度
ヲ得ヘキ距離〕



第十二節

負荷ノ影響

信書管附着ハ成績ノ上ニサレタル影響ナキカ如シトシテ
信書管裏ヲ負ハレムル時ハ五〇斤ノ巨鳥ニ於テ約二〇%ハ成績ヲ低下セシムモノナリ
故ニ信書管ヲ携行セシメニハ平素ヨリ負荷ニ對スル訓練ヲ課シ置キ
要ス而斤以上ノ遠距離ヨリハ用ヒサハラ可トス鳩ハ約五九ノ重量ヲ有スル

寫真器、携行し得へし雖も、此ハ格梯的ニ負荷ニ對スル訓練ヲ課セタル結果ナハ、輕卒ニ鳩ニ物品ヲ携帶セシムヘカラス

第十三節 危險トノ關係

猛鳥、襲撃、狩獵者ノ射撃ヲ受ケル時ハ直接危險ヲ受ケタル鳩ハ、還し得ザルノミナラス相伴ヒテ飛翔中ノ鳩ハ其ノ儘附近ニ身ヲ潛メ數日後漸ク返還スルコトアリ、又恐怖ノタメニ後放鳩訓練ノ成績著シク不良トモナリ、一般ニ集團放鳩及ヒ往復通信ハ猛鳥及狩獵者ノ目標トナリ易ク被害者ニ故ニ危險ノ機会ト程度ヲ僅テ下シムルタメハ一羽ヲ間隔ヲ置キテ放鳩スルヲ可トス、秋冬ノ獵期ニ及ヒ猛鳥ノ潜伏地方ニ於テハ之等ノ被害ハ相チシノ程度ニ達ス。

第十四節 鳩ノ心理状態トノ關係

嫌忌心

鳩コレヲ鳩舎、掌鳩者ニ親ケ、暖ク與ヘス類回使用スル時ハ嫌忌心ヲ惹起シ若シク攻撃性ヲ減少セシムルモノナリ。

大正十三年度横須賀航空隊自由氣球演習ニ際シ三日ニ一度ワ、約一月間連續使用セシメ回数ヲ多クナルニ從ヒ成績良好トナルヘキニ却テ結果不良トナレリ。

其後約半月休息、上全一也、放鳩セシニ優良ナル成績ヲ得タリ。

又熱心ニ抱中ノ鳩ヲ使スル時ハ優良鳩ト雖モ其跡スルコトモ其地
飼育上不快ノ感ヲ抱カレムトハ成績不良ノ原因ナリ。

(2) 恐怖心

第十三節ニ記載ノ危害ニ對スル恐怖心、第十四節ニ記載ノ海ニ對スル恐怖心、

(3) 出来心

時ニ氣マダ出来心ノタメ各氣ニ飛翔シテ吸葉成績ヲ不良ナラセムコトアリ

(4) 依頼心(心強サ)

遠臣商放鳩ニ於テハ各個放鳩ヨリモ二羽若シハ數羽ノ集團放鳩ノイカ
心強サヲ感セシムルカ故ニ意志ノ弱キ鳩ハ吸還ス。

其他種々鳩ノ心理狀態ニ依リ成績ヲ不良ナラセムコトアルヘシト雖モ要スル

ニ、(一) 飛翔能力、(二) 方向判定能力充テラルモ、(三) 吸葉意志充テラルサルニ起

因スルコト多キヲ以テ如何ナル障害ヲモ突破スルニ是ハ強烈ナル吸葉意志及

感情ヲ養ハサルヘカラス

第十四節 放鳩法トノ關係

各個放鳩ニ依ルヘキカ集團放鳩ニ依ルヘキカ決定スルニアタリ、顧慮スベキコト

項尤、如シ

(一) 集團放鳩ノ際ハ一般ニ吸還精度良好ナリ故ニ幼鳩ノ遠臣商訓練ハ

(成可) 成鳩ノ安否内着ヲ付シテ、集團放鳩ニ依ルコトハ實用通暢場合

各個放鳩ニ依ルヘキモノトス

(2) 集國放鳩ノ場合ハ鳩ハ気強サヲ感スルモノノ如ク一羽ナラハ飯糰ヲ中止スル如キ遠巨高ニ於テモ二羽乃至三羽ナラハ相勵マレテ飯糰セントス。從ツテ集國放鳩ノミニ依ツテ訓練ヲ行ヘ他ノ鳩ニ依賴セントスル惡習墮ス。故ニ遠巨高ノ場合ハ二羽若クハ三羽ノ集國放鳩ヲ可トスルモ近距離ノ場合ハ一羽放鳩ヲ可トス

(3) 第十一節ニ述ヘタル如ク一羽ハ危害ノ機會ヲ少イカシムルノミナラス損害ヲ局部ニ止ムルヲ得

右ニ依リ實用通信ニ際シテハ放鳩數ヲ左ノ標準ニ依リテ定ムルヲ可トス

一五。軒以内ハ一羽放鳩

一五。軒以上ハ二羽以上放鳩

但シ石ハ軍ニ標準ヲ示シタルモノニ過キス天候不良ノ場合及ビ

重要ナル通信ノ以遠ヲ期スル場合等ニ依リテハ更ニ多クノ

鳩ヲ放ツヘキモノトス

第十五節 放鳩地點トノ關係

(1) 放鳩地點地上ナルモ船トナルモ人差イシ航空機上ナルトキハ成績稍良シ

(2) 海面上ニ於テ船上ヨリ放鳩スルトキハ放鳩時上ヲ旋回點翔ラ、隨從スル

傾向アリ

(3) 放鳩地卓トシテハ展望良好ナル場所最適ニシテ山峽溪谷河岸等ハ稍不良ナル結果ヲ招致スルコトアリ。

(4) 山脈ヲ横断セシメントスルハ山麓ニ於テ放鳩スルヲモ寧ろ口更ニ遠方ニ於テ放鳩スルヲ結果良好ナリ

第十六節

放鳩者トノ關係

放鳩者ノ鳩取扱如何ハ放鳩成績ニ影響スル所頗ル大ナリ取扱上注意ハ種々アリト雖モ要ハ鳩体ノ衰弱ヲ防キ且ツ放鳩感情ヲ充分ナラシムルニアリ基準成績ハ寧ろ鳩兵ガ放鳩者タル場合ニ成績ナルヲ以テ實用通信ノ際ハ如ク寧ろ鳩兵以外ノ者カ放鳩者トナル場合ニハ指定ノ事項ヲ厳守セザレハ不良ナル結果ヲ生ス

第十七節

飼育者トノ關係

飼育ノ如何ニ依リテハ放鳩意志及鳩ノ体ウ(即チ飛翔能力)ニ差異ヲ生ス訓練ノ方法如何ニ依リテハ方向判定能力飛翔能力歸巢意志ニ差異ヲ生ス故ニ飼育者ト鳩ノ能力トノ間ニハ最も大ナル關係ヲ有スルモノニシテ鳩通信ノ成果ヲ左右スルモノハ鳩ニカラスシテ人間ナリト云フモ過言ニアラス

第十八節

年齢トノ關係

幼鳩ハ成鳩ニ比シ一般ニ体力及ヒ智能ニ於テ劣ル即飛翔能力及ヒ
 方向判定能力ニ於テ劣ル近巨鳥ニ於テハ速カハ却テ成鳩ヨリモ
 良ナルモ一般ニ失踪多ク天候其他ニ依ル変化ニ適應セサル故ニ
 確實性ナシ生後半ニ年ニシテハ新ノ放鳩訓練ヲナシ得ルモノ
 ナレトモ將來ニ對スル体力及ヒ訓練ノ際ニ失踪數ヨリ考フルトキハ
 新訓練ノ負擔過大ナリ成鳩ハ二歳ヨリ八歳迄ノ間能力ニ大差
 ナレト雖モ三四歳鳩ハ体力強健智能亦實セルカ故ニ成績最モ良
 好ニシテ二歳鳩ハ訓練回数ナキタメ八歳以上ノ鳩ハ老衰セルタ
 メ能力稍劣ル尚年齢ト前年ニ於テハ訓練程度トハ能力上ニ
 密接ノ關係ヲ有スコレヲ表示スレバ

年齢	訓練法	訓練巨鳥ニ對スル予想獲得成績	訓練後ニ於ケル實用 通信可能巨鳥
當歲鳩 羽二年前三月迄 五。新訓練(七五羽以上集團) 當年八月迄	未訓練鳩基準成績 既訓練鳩基準成績ト間	五。料	三。料
二歲鳩 三。新訓練(五羽以上集團) 當年八月迄三五。新訓練	既訓練鳩基準成績ト間	二。〇。料	三。五。〇。料
三歲鳩 當年八月迄三五。新訓練	既訓練鳩基準成績		

急設鳩舎ニ於ケル訓練法及ヒ予想獲得成績

年 齡	訓 練 法	訓練成績對予想獲得成績	訓練成績於實用通信可能巨細
當 歲 鳩	當年八月或八月翌年三月迄 言。料訓練(七五斤以上集團)	未訓練鳩基準成績	(一〇〇 斤)
二 歲 鳩	當年八月迄 五五〇 斤訓練	既訓練鳩基準成績	(三五〇 斤)

第十九節 雌雄トハ關係

一般ニ雌鳩ハ雄鳩ニ比シテ知能(方向判定力)及ヒ体力(飛翔能力)ニ於テ纔ニ劣ル但シ時ニ老練此鳩ニシテ収果能力上雄鳩ニ優ルモアリ

第二十節 鳩種トハ關係

傳書鳩ニハ白耳義種、佛蘭西種、英國種、独逸種、米國種等種々アリテ能力各々先天的ニ異レリ

殊ニ白耳義種中ノ良種ニ至リテハ現在我國ノ軍鳩ニ比シテ遙ニ優越セリ現在我海軍ニ於テ飼育スル鳩ハ中等級ノ佛國種ニシテ其後數年同所ノ繁殖シタメ能力素質共ニ低下シタルモノナリ故ニ新ニ優秀外國產ヲ輸入スルカ或ハ本邦民間優良鳩ヲ購入スル等ノ手段ニ依リ品種改善ノ實ヲ擧グルハ更ニ良ナル成績ヲ得ラルヘシ
民間優良鳩ヲ購入スルハ實施方法トシテハ容易ナルモ先天的ニアリ優

凡テ育鵠鳩ヲ基礎トスル品種改善ハ優良鳩ノ作出率極メテ僅クシテ從ツテ多數鳩ノ飼育ヲ必要トシ之ヲ訓練淘汰ニ無益ニ多大ノ費用ヲ要スルノ欠點アリ以テ一見高價ナルカモキモ外國產ノ最高級優良種ヲ輸入シ他種配合ニ依ル品種改善ヲ行フヲ得策提徑トス

第三章 未訓練鳩能力

第一節 訓練放鳩成績及規定ノ放鳩法ヲ行ヒし時ノ成績

未訓練鳩ニ三種アリ一ハ純然タル未訓練鳩即チ当年ニシテ一ハ前年ニ於テ或ハ當年三月迄ニ中途迄訓練ヲ終リセシ歳鳩ナリ。以前ニ於ケル訓練程度五ノ料以下ノモノハ純然タル未訓練鳩ト同様ニ見做シ得トモ五ノ料以上ノ訓練ヲ行ヒシモノハ未訓練鳩ト既訓練鳩トノ中間ヲ占ムル成績ヲ得ヘシ

純然タル未訓練鳩ノ訓練放鳩成績ハ次ノ如シ。
一ノ二五ノ料以内ニ於テ

六ノ料時以上	一〇	%
四ノ料時以上	五〇	%
二ノ料時以上	八五	%

ヲ示シ既訓練鳩成績ト大差ナキカ如キト雖モカハ良成績ヲ得シハ集
國放鳩(指導者トシテ成績ヲ附スル事アリ)ヲ行ヒシタナリ
若シ実用通信場合、如ク一五〇粒以下ヨ一冊一五〇粒以上ヨ二冊以上ノ
一着放鳩ヲ行フ時ハ右表ノ三分ノ二位ノ成績ヲ得ルモノト推定ス即チ

六〇粒時以上	七	%
四〇粒時以上	三三	%
二〇粒時以上	七〇	%

是ヲ未訓練鳩基準成績ト呼稱ス

- (1) 初回訓練鳩ハ二五〇粒以上ニ於テ通信ニ使用セサルモノトシテノ算ス
(2) 三〇粒以下ノ成績甚ク不良ナルモノシテ訓練ノ初期ナルタメニテ五〇粒以上
ノ訓練後モハ未訓練鳩基準成績ヨリ寧ロ良好ナル成績ヲ得ヘシ
(4) 面粒以内ノ通信ノ際同地矣以上ノ距離ヨリ三回以上放鳩セシ後テハ既
訓練鳩基準成績ニ近キ成績ヲ得タルヘシ

第二節

記憶度

某巨鳥訓練後或ル日数經過後同一成績(未訓練鳩基準成績)
ヲ得タルハキ距離ノ大体ノ標準ヲ推定スルハ右表ノ如シ

訓練巨鳥ノ数	訓練後	半ヶ月	一ヶ月	二ヶ月	四ヶ月	半年	一ヶ年
五〇粒	七五	五〇	三五	三五	三五	三五	三五

但し一ヶ月半以上経過ノモノニ対シテハ二〇斤附近ニ於テ準備放鳩ヲ行フモノトス

第三節

既訓練放鳩距離ノ記憶巨鳥ヨリ通信距離遠キ場合ノ返還精度

訓練巨鳥ノ通信距離	五〇斤	七五	一〇〇	一二五	一五〇	二〇〇
五〇斤	五〇%	七五	七〇	七五	八〇	八五
一〇〇斤	一〇〇%	七〇	七五	七〇	七五	八〇
一二五斤	一二五%	七〇	七五	七〇	七五	八〇
一五〇斤	一五〇%	七〇	七五	七〇	七五	八〇
二〇〇斤	二〇〇%	七〇	七五	七〇	七五	八〇

訓練巨鳥ノ通信距離	半ヶ月	一ヶ月	二ヶ月	四ヶ月	半年	一ヶ年
七五	一〇〇	七五	五〇	五〇	三五	三五
一〇〇	一三〇	一〇〇	七五	五〇	五五	三五
一二五	二〇〇	一五〇	一〇〇	五〇	五〇	三五
一五〇	二五〇	二〇〇	一五〇	七五	七五	五〇
二〇〇	三〇〇	二五〇	二〇〇	一〇〇	七五	五〇

第四節 天候トノ關係

天候良好ナル場合ニテ想取還精度七〇%ナル訓練程度ノモノヲ(七〇%
ナル場合ニハ適當ニ修正ナルヲ要ス)天候不良ナル日ニ放鳩セシ時テ想
取還精度ヲ次表ニ示ス

天候距離	五〇米以内	一五〇米以内	二五〇米以内
甲	七〇%	七〇%	七〇%
乙	五〇%	三〇%	一〇%
丙	三〇%	〇%	〇%
丁	〇%	〇%	〇%

第四章 準備日數

第一節 能力ト準備日數

陸上固定鳩舎鳩ノ能力ハ其地ニ馴致後ノ訓練日數ト密接ナル
關係アリ故ニ第一ニ鳩ノ年齡ノ欄ニ於テ一部述ヘタルニ準備日數
ノ多少ハ各種状況ニ於ケル能力飼育訓練ノ難易經費ノ多少ト共ニ
準備日數ノ價值ヲ決スル上ニ於テ重要ナル事項ナルヲ以テコニ重ネテ
論セントス

第二節 常設鳩舎ニ於ケル準備日數

(四)

常設鳩舎八平時多準備之置り、ハ、鳩舎ナルヲ以テ失踪痛死ニ依
 此減少ハ其、鳩舎ノ產出鳩ヲ以テ補ヒ得ル程度ノ訓練ヲ行ハサルカラス
 此ノ見地ニ鳩ノ準備日數次、如シ（第壹章第七節 参照）……
 必要ニ應後鳩數ニ達スル迄ハ幼鳩ヲ他鳩舎ヨリ移殖スルモノトス
 移殖後 六ヶ月ニシテ 五〇斤通信可能
 全 滿一ヶ月ニシテ 一〇〇斤通信可能
 全 滿二ヶ月ニシテ 三〇〇斤通信可能
 又訓練終了鳩ノ通信準備日數ニ関シテハ第壹章第三節ノ通信
 準備訓練日數ヲ參考トシテ大略ヲ判定スルヲ得ヘシ
 （參考）陸軍ノ研究ニ依レハ訓練終了後半ケ年以上ヲ經クル
 鳩ノ通信準備日數ハ次ノ如シ

距離	年齡	當歲	二歲	三歲
一〇〇斤		一五	一〇	九
二〇〇斤			一七	一五
三〇〇斤				二〇

第三節

急設鳩舎ニ於ケル鳩ノ準備日数

急設鳩舎ハ戰時事変ノ際若クハ其ノ前年ニ於テ急遽ニ設備スル
 因定鳩舎ニシテ其ノ設備法ニ三法アリ。

(1) 未訓練幼鳩ヲ他ノ鳩舎ヨリ移植ス。

急設イハテ幼鳩ノ多数ヲ移植シ矢踪鳩数及ヒ体質ニ對スル特

系ノ影響音等ニ關シテハ顧慮スル所ナク遠距離訓練ヲ行フ。

移植鳩ハ生後一ヶ月以上ニシテ未タ訓練ヲ行ハサル者歳鳩ナリトス。

準備日数ハ次ノ如シ(第二章第三節参照)

移植後四月ニシテ一〇〇軒通信可能

一ヶ月ニシテ三五〇軒通信可能

(2) 既訓練鳩ヲ他ノ因定鳩舎ヨリ移植ス

各種年齢ノ移植鳩ヲ以テ百軒通信ヲ行フ準備日数概テ下ノ如シ

年 齡	多 歲	二 歲	三 歲	四 歲	五 歲
訓練日数	二〇日	三〇日	三〇日	三五日	三五日
訓練日数	三〇日	三〇日	三〇日	三〇日	三〇日
百軒通信ノ 飯還積度	九〇%	七〇%	五〇%	三〇%	一〇%

即チ三歳鳩以上ノ移植ハ困難ナレトモ二歳鳩及ヒ一歳鳩ハ三月半ニ於テ
 後相當ニ信頼シ得ル通信ヲ行フヲ得。

唯注意スヘキハ移殖成鳩ノ飼育ハ在介ナル懸練ト用ハリト行フヘイ
 シレテ然レハ右表以上ノ矢際鳩ヲ生スヘシ又民間購買鳩ヲ移殖シタル場合
 ニ於テハ特ニ民間管理法ノ異ナルモノヲ以テ更ニ多クノ準備ト数ヲ要ス
 (ハ) 移動鳩舎ヲ陸上ニ固定セル場合
 横須賀航空隊ニ於テ未ダ此ノ實驗ナキ駐止期間長キ場合ニ於ケルニ、三ノ例ヨリ
 推定スルハ

十日ニシテ

一〇〇斤

三十日ニシテ

二〇〇斤

六十日ニシテ

三〇〇斤 通信可能ナルヘシ

第五章 艦上鳩ノ能力

第一節 艦上鳩トシテ採用スヘキ鳩

(一) 艦上鳩トシテ採用スヘキ鳩ハ幼鳩トシテ要ス其ノ幼鳩ハ艦上ニテ孵化セルモノヲ
 毛陸上固産鳩舎ニテ孵化セルモノニテ可ナリ。

艦ニ搭載スヘキ年齢ハ生後五ヶ月以内ヲ可トシ。搭載後成ルヘク早ク通信
 ニ用ヒントスル場合ハ生後三ヶ月乃至五ヶ月ヲ適多トシ。搭載後充分訓練
 ヲ行ヒタル後ニ使用セントスル場合ハ生後一ヶ月乃至三ヶ月ノモノヲ適
 トス

①成鳩ハ幼鳩時代ヨリ艦上ニ於テ飼育訓練セルモノミ通信鳩トシテ使用スルヲ得ヘク陸上固定鳩舎ニテ飼育訓練セラルモノハ繁殖用トシテハ使用シ得ヘキモ通信用トシテハ不適ナリ。但シ固定鳩舎、成鳩ニシテ生後何等訓練セザリモノハ艦上鳩トシテ採用スルヲ得。

第二、即、碇泊中ノ通信ヲ行ヒ得ル道ノ訓練日数

(一)生後三月乃至五月ノ鳩ヲ以テ艦上鳩ヲ養成シテ搭載セル場合ニ
ツキ示ス

1. 鳩舎出入練習

搭載後五日乃至十日ニシテ完成

2. 任意飛翔

鳩舎出入練習終了ト共ニ開始シ毎日五分乃至十分宛行フ

3. 強制飛翔

搭載後三日ニシテ完成

4. 碇泊中ノ訓練放鳩

收容後三日乃至五日ヨリ開始シ毎初ハ一羽乃至五羽ヲ行フ

5. 泊地移動後ノ訓練放鳩

收容後四日乃至六日ヲ入港ヨリ三羽乃至六羽ハ港内ヨリ放テ

一。新乃至十三ノ通信ヲ行ヒ得ルニ至ル。
 泊地移動後、訓練放鳩

收容後七。日ニシテ一港ヨリ十五ノ港ヨリヨリハ四。ノ新(但シ

前日ニ一五ノ新、準備放鳩ヲ行フ)ノ通信可能ニ至ル。

二。但シ右ニ記載セルハ比較的移動多キ艦船ニ於ケル實驗ヲモトセルヲ以テ、移動少キ艦船ニ於テハ右記ヨリモ多ク日数ヲ要ス大體ニ於テ泊地移動後、訓練放鳩ヲ行ヒ得ル迄ハ五回ハ移動ヲ必要トスル

第三、即 碇泊中ノ通信能力

一。入港當日通信能力(入港ノ際、飛翔訓練ヲ課シタルノミニシテ準備放鳩ヲ行ハス)

小、陸上放鳩。――一五ノ新以內ノ通信ニ適ス(返還精度九五%速力

四ノ新時)ニ。新附近ニ於テモ通信可能ナル返還精度ハ八%ニシテ

其速力ニ。新時乃至三ノ新ナリ。

口、機上放鳩。――三ノ新以內ノ通信ニ適ス(歸還精度八%速力四。

新時)

ハ、艦上放鳩。――一五ノ新附近ニ於ケル成績ヲ見ルニ歸還精度八%ニモ

速力一。新時乃至四。新時ヲ示ス。

(二) 入港翌日後、通信能力(入港当日ニミテ)放鳩ヲ行フ。

1. 陸上放鳩

四。料ニ於テ返還精度ル。%速カ四。料時四。料、放鳩ヲ行ヒタル
後ヲバ六。料ニ於テ返還精度九。%速カ四。料時ナリ。
ロ。機上放鳩

五。料ニ於テ返還精度七。%速カ四。料時

(三) 碇泊中、通信能力ニ關係スル事項

1. 地勢、影響大ニシテ地勢複雑ナル所ニ於テハ成績不良ナリ。

ロ。遠距離ニ陸上放鳩ノ場合ハ先ツ沿岸ニ出デリルニ沿ヒテ飯舎セ
ントスルノ通性アルモノ、如シ從ツテ沿岸ノ形状ニ依リ殆ント直
線的ニ飯舎スル場合アリ又大ナル迂回ヲナス場合アリ。

ハ。遠巨離海上放鳩ノ場合ハ先ツ陸岸ニ向ヒテ飛翔スル傾向アレドモ
陸岸附近ヨリ放鳩セル場合ハ逆ニ海面ノ方ニ向ハントスル傾向アリ。

ニ。艦上ヨリ放鳩ノ場合ハ訓練足ラサル鳩ハ放鳩艦ニ追從セントスル
傾向アリ、之ノ傾向ハ前項ト共ニ飯巢成績ヲ不良ナラシムル因トナル。

ホ。艦型ノ識別力ハ若干之レヲ有シ、同型艦ノ識別ハ鳩舎ノ有無
ニ依ルモノ、如シ但シ時ニ同型艦ニ紛レ込ム場合アリ。

ヘ。在泊艦ノ多数ノ場合ニ於ケル成績ハ單艦在泊場合ト大差ナシ

此場合鴉舎艦直ニ発見し得ル能力ハ艦型ノ識別力ニ非ス
シテ位置ノ記憶力ナルカ如シ

ト長期碇泊セル後同一港内ニ於テ碇地ヲ変更セル際ハ旧碇地ニ
執着スルモノ多ク旧位置附近ニ他ノ艦船アル往々其ノ艦
橋桁等ニ棲止スルコトアリ。

テ機上放鳩ト艦上放鳩ニ大差アルハ一ノ項ニ記シタルカ如ク其ノ
原因ハ機上ヨリ放鳩セラルル場合視界廣濶ニシテ沿岸及鳩
舎艦ノ發見容易ナルニアリト考ヘラル。

(四) 艦上鳩ノ性質トシテ第一ニ長期碇泊セル泊地ニ付スル執着力ヲ
有シ第二ニ鳩舎ヲ搭載セル艦船ニ付スル執着力ヲ有シ第三ニ
飼育セラルル鳩舎ニ執着力ヲ有ス

第四節 航海中ノ通信ヲ行ヒ得ル迄ノ訓練日数

(一) 初鳩ヲ艦上鳩トシテ搭載セル場合航海中ノ通信ヲ行ハシメ
訓練ハ搭載後約三ヶ月後ニ開始スヘキモノニシテ
入港前ノ飛翔訓練

搭載後七十日より開始ス。

又 到達力十等附近ニ於ケル飛翔訓練
搭載後九十日より開始ス。

3. 近距離ヨリ放鳩訓練

急速な航行中、舍外運動充分完成セル後、即ち搭載後一〇〇日頃ヨリ五斤乃至十斤ノ放鳩ヲ行フ。

4. 高速カ航行中ノ飛翔訓練

急速カ航行中ノ飛翔訓練ニ充分ニ熟達シタル後行フ。
放鳩訓練

十斤、二十斤、三十斤、五十斤ト順ヲ追ヒ訓練ヲ進ム但シ三十斤以上ノ放鳩訓練ノ方法ニ関シテハ尚研究ノ餘地アリ、三十斤以上ヨリノ通信可能トナル迄ハ搭載後一ヶ月ヲ要ス。

(一) 航海中ノ通信ヲ行ヒ得ル準備トシテ次ニ三條項ヲ完成セシムルヘカス。

1. 鳩ノ先天性ノ有ルル海ニ對スル恐怖觀念ノ除去。

幼時ヨリ體上ニ飼育アルコトニ依リ此ノ傾向ノ大部分ヲ除キ得レトモ

此ノ先天性ノ性質ヲ完全ニ除去シ得ル迄ハ多ク、年月ヲ要ス

ヘシ現在ニ有リテハ體上ニ飼育セラルコト一ヶ月以上ニ及ブ鳩モ放

鳩ノ際、放鳩體ニ追從シ又他ノ體船陸上登航地等ニ吸引セラル、

コトヤリテ航海中ノ通信能力ヲ低下セシム

2. 航海中鳩舎體ノ状態變化ニ對スル恐怖觀念ノ除去。

艦ノ移動、推進器ニ依ル渦巻濃キ煤烟等ハ碇泊中ト状況ヲ異ニスルヲ恐怖觀念ヲ懷クモ是レカ除去ハ左程困難ナラザルモノナリ

3. 航行中、飛翔訓練ノ完成

鳩舎艦ハ絶エズ移動スルモノナリト、觀念ヲ獲得シ、航行中ノ艦船、周囲ヲ旋回飛翔シ、追従シ又之ニ連着スルニ至ル迄ハ相対ノ目撃ヲ要スルモノナリ、若宮、高崎、及金剛、於ケル實驗ノ結果ヲ見ルニ

收容後ニ十五日ニシテ不成功

收容後十五日ニシテ半成功

收容後七十五日ニシテ殆ント成功

即チテ即ニシテ航行中飛翔訓練ヲ行ヒ得ル迄ハ搭載台七十五日ヲ要ス、ニテ即ニ於ケル飛翔訓練ヲ完全ニ行ヒ得ル迄ハ更ニ数ヶ月ノ日子ヲ必要トス

第五節 航海中、通信能力

(一) 航行中、通信能力

1. 艦上放鳩(即チ航行中、艦船相互間、通信)

二〇斤附近ニ於テ(一〇斤及ヒ一五斤ニ於ケル成績モ略々之ト同称ナリ)飯還精度六五%速力一〇斤時乃至三斤時。

二、料以上ニ於テハ実験トシテ唯一回五〇料ヨリ、放鳩アリ、其ノ成績ハ返還精度六五%速力ニ。料時乃至五〇料時アルモ單ニ一回(六羽)ノ統計アル故信頼ノ價值少シ

要スルニ航行中ノ艦船相互間通信ハ現在ノ鳩ノ能力ニ於テ五〇料以内ニ於テ可能ナリト雖モ未タ其ノ通信速力一定セズ且返還精度稍不確實アルヲ以テ將來優良種ヲ輸入シテ鳩種改善ヲ行ヒ鳩其ノ能力カ向上セシムルニアリ、サレハ航海中ノ價值アル實用通信ニ用ヒ難シ

2、機上放鳩(飛行中ノ機上ヨリ航行中ノ艦船へ通信)

一〇料ニ於テ返還精度九〇%速力三〇乃至六〇料時

四五料附近ニ於テ返還精度七五%速力三〇乃至五〇料時

(一) 航海中通信能力ニ關スル参考事項

1、右記ノ如ク機上放鳩ハ艦上放鳩ニ比シ遙ニ成績良好ナリ、之レ艦上放鳩ノ場合ハ鳩ハ放鳩艦ニ追從セントスル傾向アルモ機上放鳩ニハカル事ナリ、又機上ヨリ放タレタル鳩ハ視界廣ク、鳩舎艦ヲ発見スルニ容易ナルタメナント思ハル。

只航海中ノ通信距離ノ最大限度ヲ決定スルモノハ大体ニ於テ鳩ノ視力ナリト云ヒ得ヘキ、鳩ノ智能モ亦大ナル關係ヲ有ス。

即チ鳩ノ視力ニ以テ艦影ヲ認メ得ヘキ距離ニ鳩舎艦カナル場合
必ス常ニ敵索スト斷言シ得ルモノナシ又視界外ニ放鳩サレタ
時搜索品船中視界内ニ入リテ敵索スルコトモアリ要スルハ鳩ノ
視力カ最モ重大ナル要素ナルコトハ明ナリ。而シテ鳩ノ視力ハ人間
ノ其レヨリ三倍良好ナリト云フ。說アレハ之レヲ明カニ数字的ニ示ス
能ハス

ハ、艦上ヨリ放タレタル鳩ハ遠距離ニ艦影ヲ認メ而モソノ鳩舎艦カ
ヤ否ヤ不明ナル時、之レ向ヒテ直ニ飛翔スルヤ否ヤハ其ノ時ノ状況ニ
依ルモノナリ。

若シ確實ニ鳩舎艦ナリト認ムル迄ハ其ノ艦ニ向ヒ飛翔セザルモノナリ
トセハ艦型(或ハ鳩舎)識別巨商カ即チ通信巨商ノ限度ト
ナルヘク艦型不明ナル時ハ放鳩艦ニ追從セントスル傾向ヲ生ズヘシ
又戦闘中ノ場合ノ如ク多数ノ艦船存在スル時鳩舎艦ヲ
識別スルカハ各個鳩ノ智能ニタルモノナルヘシ

ニ、航海中、鳩通信ハ速度大ナラサル理由アリ

ノ相互移動スル兩艦船ヲ飛翔スル政直線飛翔ヲ追從ワテ其ノ
速カハ普通五ノ軒ニシテ即チ左程大ナラス

ニ、鳩ハ放鳩艦ニ追從スル傾向アリ。

3. 鳩カ鳩舎艦ニ向ハントスルハ自身ト鳩舎艦トノ會合地矣ヲ予
想シ、其ノ地莫ニ向テラスニテ直接、其ノ艦船ニ向クモリ。
故ニ放鳩艦（或ハ放鳩莫）ト鳩舎艦トノ對勢ニ依リ、通信成績ニ
大ニ差異アリ。即チ反航ノ場合ハ一般ニ所要時少ク同航ノ場合ハ
所要時大ナリ。

ホ、陸岸附近ニ於ケル放鳩ノ場合鳩ハ陸地ニ吸引セラル、傾向アルヲ
鳩舎艦ノ位置カ放鳩桌上陸岸ノ間ニ置レハ成績良好イレトモ
此ノ反對ナレハ不良ナリ、此ノ傾向ハ艦上訓練ノ初期ニ於テハ
殊ニ著シ。

ハ、長期航行後出港スル時ハ碇泊地ニ吸引セラレ碇泊地ヨリ遠カラレ
所ニ於テ放鳩スルトキハ碇泊地ニ向ハントスル傾向アリ。

第七、即 將來ニ於ケル艦上鳩飛送ノ可能性

(一) 艦上鳩能力ノ進步ハ即通信距離ト通信速力ト増大ノ外ニ不
而シテ鳩ハ絶エズ適當ナル配詢ニ依リ品種改善ニ其ノ能力ヲ
進歩セシメ得ルヲ以テ將來艦上鳩能力モ亦向上セシメ得ヘキモノナルコト
疑ナシ

(二) 艦上鳩ノ碇泊中ニ於ケル通信距離ノ増大ハ易ミタルガレテ体魁、智

能優良ナルを耳義鳩若シハ御世間西鳩ニ依リ品種改良ヲ行フニ
 (三) 般海ノ艦船相互ノ通信能ハ増大ハ尙將來ノ研究努力ニ俟ツヘキモノナシ
 其ノ通信巨禽ノ最大限度ハ実用上鳩ノ艦影認識巨禽(又ハ艦型認
 識巨禽)トスルヲ至多トスルハ大体ニ於テ或ル制限アリ通信能力向上ノ
 方法トシテハ鳩種ノ改善ニ依リ智能視力飛翔速力ノ増大ヲ必要
 トスルヲ以テ之カ實現ハ今後相違ナ長年月ヲ要スルモノナリ。

第六章 陸上移動鳩車鳩ノ能力

第一節 整置後三十四時間以内ニ六斤乃至十斤通信

ヲ行フタメ訓練及成績

一 使用鳩及ヒ移動訓練

主トシテ当歳鳩ヲ大型(約七〇羽入)或ハ小型(約四〇羽入)ノ
 鳩車ニ入レ約一ヶ月間基礎訓練ヲ行ヒタル後三四日毎ニ移動
 ニ移動性ヲ與フ

二 使用準備法及ヒ結果

整置ヒタル後二回乃至三回ハ舍外運動ヲ行ヒ後三十四時間ニシテ
 六斤乃至十斤ノ放鳩ヲ行フニ歸還積度約九〇%ナリ。

第二章 白粉通信ヲ行フ準備日数及訓練法

訓練方法	所要日数	完成巨商(%)	繰還精度%	記 事
休息日ヲ設ケ放鳩 一回數ヲ少カラシムル 法	三日	五〇	九五	三日毎ニ移動シ約一ヶ月ヲ基礎訓練ヨリタル 後休息日ヲ設ケ躍進巨商ヲ増大シ放鳩 回數ヲ減サス
(二) 一百回連日 放鳩法	六日	一〇〇	四〇	約二週間毎ニ移動シ約二ヶ月ヲ基礎訓練 ヨリタル後規定ノ躍進法ニ依リ百回連日 放鳩ヲ行フ
(三) 百數回連日 放鳩法	八日	五〇	九五	約二ヶ月間其基礎訓練ヲ行ハタル後數回 連日放鳩訓練ヲ行フ
	一日	一〇〇	八三	
	五日	五〇	三〇	
	六日	一〇〇	二〇	

備考 石ハ陸軍現施ノ移動訓練ノ研究結果ヲ摘記シタルモノナリ

第七章 夜間鳩ノ能力

第一節 鳩ヲ以テ白粉ノ夜間通信ヲ行ハクモ準備日数
約鳩ヲ以テ約一ヶ月間夜間訓練ヲ行ヒタル後、夜間放鳩訓練ヲ
行フニ毎回訓練放鳩成績ハ返還精度四〇%—七五%ナルモ大体ニ於
テ優秀ナル素質ヲ有スル鳩ヲ使用スル時ハ三日間ノ放鳩訓練ヲ以テ
白粉通信ヲ行フ事ヲ得ヘシ

第二節

既訓練、應回成鳩ヲ以テスル百籽夜間
通信ノ準備日数

訓練放鳩成績ハ飯還精度 $\frac{3}{5}$ ノ $\frac{1}{10}$ ナルモ、優秀鳩ヲ使用スル時
ハ平日間ノ準備日数ヲ以テ百籽ノ通信ヲ行フ事ヲ得ヘシ

第八章 往復通信鳩能力

第一節 往復通信可能距離及ヒ難易

往復通信ハ五十籽迄ハ確實ニ一日一往復ノ通信ヲ行フコトヲ得ヘシ
百籽以上ニ於テハ一日一往復ハ体力ノ消耗多ク至テ施行シ得ル程
度ナリ。故ニ百籽附近ニ於テハ一日一往復トシテ、正確ノ交番ニ使用シ、毎日
輸送シテ放鳩スルハ故ニ交通ノ如何ハ完成ノ難易ニ天ナル關係ヲ有ス
又性慾旺盛時期ハ棲息鳩舎ニ封スル執着性強キハ故ニ春季ハ
往復通信ノ完成容易ナリ。

第二十四節 六 料往復通信成績（中野横須賀間）

一 往復通信完成必要セリ日数

準備 日数

訓練 日数

放鳩訓練 日数

通信訓練 日数

合計 日数

二 往復精度

三月頃 約 七〇%

七月頃 約 八〇%

一月頃 約 五〇%

往復鳩数多々以テ同一通信支ヲ相違多数ノ鳩ヲ携行セシメ得ルヲ以テ
通信到着精度ハ往復精度ヨリ大ニシテ殆トテ常ニ一〇〇%ナリ。但シ一月中
二、三回位要メタメ翔ハル月ニモスルメニ往復ヲ中止スルハ得ルナリ
右ハ陸軍實施ノ往復訓練ノ研究結果ヲ摘記シタルモノナリ

附録

第一陸上固定場舎成績表

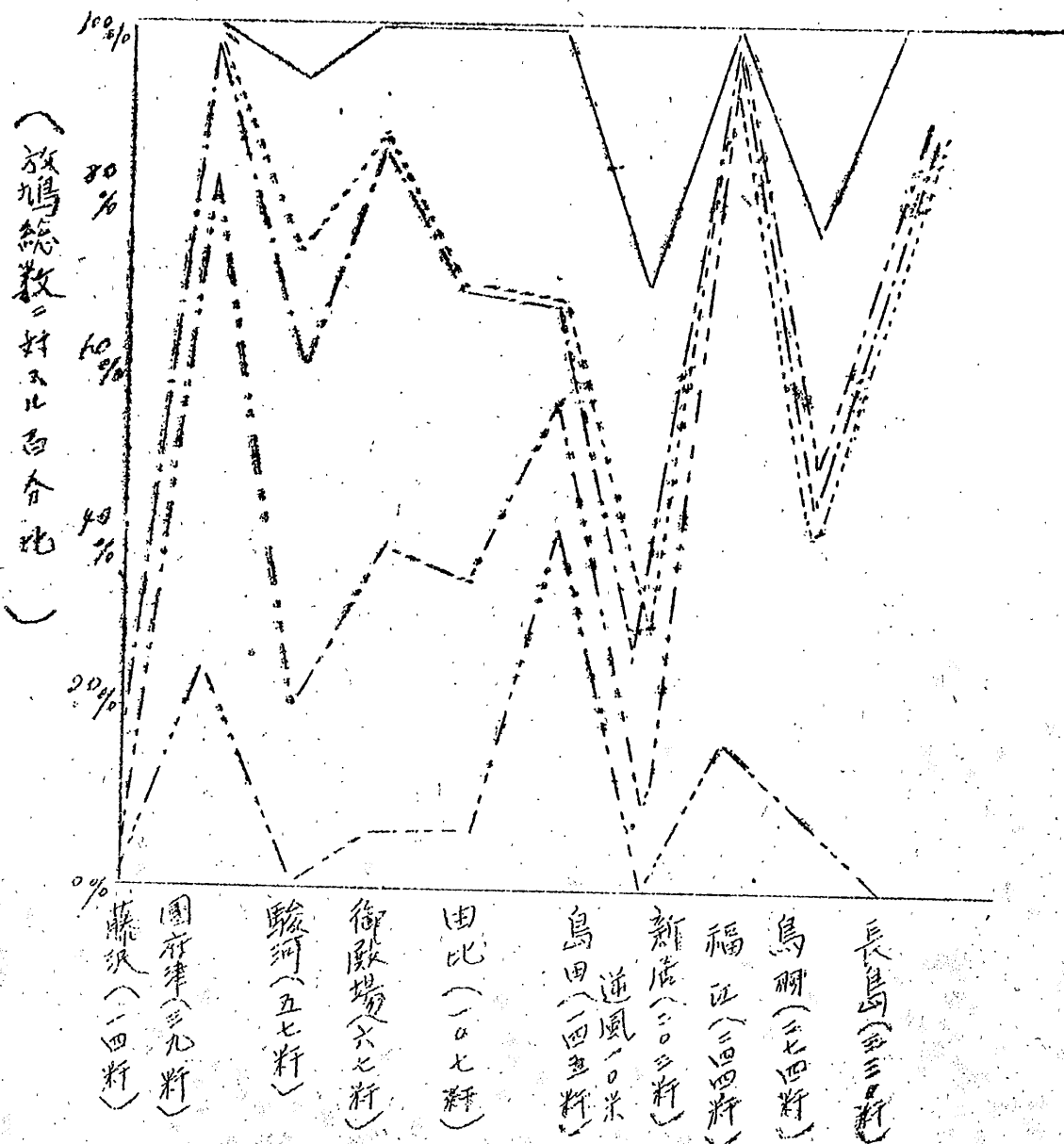
一、本成績表ハ軍鳩ノ失踪率、速力等ヲ表示スル目的ヲ以テ作製セリ、
 二、本成績ノ調査材料トシテ用ヒタル鳩ハ横須賀航空隊ノ固定場舎鳩ニシテ
 大正八年研國ヨリ輸入セル鳩ハ一代ヨリ四代ニ至ルモノナリ、
 三、本表ニ於テ既訓練鳩ト稱スルハ前年ニ於テ三〇〇斤附近迄訓練
 セル鳩（概テ二年鳩以上ナリ）ニシテ未訓練鳩トハ前年ニ於テ訓練ヲ
 行ハズル（概テ一年鳩ナリ）
 四、本表ハ各線毎回共概テ十五羽乃至三十羽ノ統計ニシテ相當ニ信
 頼スルニ足ルモノトス、
 但し稀ニ十羽乃至六羽位ノ統計ニ至ルモノナリ。

大正十一年度 未訓練西線鴿(前年ニ於テ身成ニ成リ訓練セシメたる鴿)

—— 級還鴿(75%) - - - 当日級還鴿(80%)

- - - 20粒時以上(88%) - - - 60粒時以上(18%)

- - - 60粒時以上(54%) (括弧内、%ハ其年平均成績ヲ示ス)



大正十年度 未訓練西線鴿

—— 販還鴿 (95%) ——— 当日販還鴿 (93%)
 - - - 20 斤時以上 (88%) - - - 60 斤時以上 (1%)
 - - - 40 斤時以上 (42%)

(當年一月二日・三月・五月六月七月・於テ訓練セル成績各個トフルハ各個放鴿ナセルモ能入ナシモハ合計一音放鴿若シハ集團放鴿)

